

「絵に表す」表現と鑑賞の一体的な指導法についての一考察  
—— 絵本と作例鑑賞から広がる表現の多様性 ——

A Teaching Method Integrating Expression and Appreciation :  
Expanding Diversity of Expression through the Appreciation of Picture Books and Artworks

大畑 幸恵

OHATA Yukie

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第 18 号 2023 年

## 「絵に表す」表現と鑑賞の一体的な指導法についての一考察

——絵本と作例鑑賞から広がる表現の多様性——

### A Teaching Method Integrating Expression and Appreciation :

### Expanding Diversity of Expression through the Appreciation of Picture Books and Artworks

大畑幸恵\*

OHATA Yukie\*

#### 要旨

図画工作科の内容のうち、水彩絵の具を使った絵画表現に苦手意識を持つ大学生が複数存在する。小学生においては、発達段階の中で再現的な表現につまずきが発生しやすい傾向にある。そこで本稿では、小学校教師を目指す大学3年生に対し、「絵に表す」一連の活動の中で、表現と鑑賞の一体的な指導法について考察を行った。導入には選定した絵本の読み聞かせをするとともに、制作前に作例の鑑賞を行い、多角的なものを見方を深めた。制作時には表現の幅を持たせることの意義を検討した。最後に、学習指導要領を踏まえて指導につなげていく教育実践とアンケートの分析結果を報告する。

キーワード：絵画表現、鑑賞、指導法

#### 1. 図画工作における課題

本学教育学部では大学1年前期に図工科目が、2年後期には選択科目としての図工科目が1つ開講されている。3年後期の「図画工作科教育法」ではそれらの授業体験を踏まえ、小学校図画工作科の指導力を身につけていくことをねらいとしている。15回の授業では、児童の表現の発達段階や、指導要領にある図工科の目的・評価などについて講義を行うとともに、図工科の5領域（造形遊び、絵、立体、工作、鑑賞）の体験と指導法について学習する。本論は、その内の「絵に表す」について考察するものである。

小学生にとって図画工作は、学研教育総合研究所の調べによると好きな教科第3位で16.2%の投票率を得ている。1位の算数20.0%と比べても多くの子どもが好きな教科だと認識していることがわかる。<sup>1)</sup> 対して中学生にとっての美術は、好きな科目第8位4.8%で、小学生の図工が好きな割合から著しく低下し、1位数学22.7%と比べても落差が大きいことがわかる。<sup>2)</sup> なぜ急低下するのかは明らかになっていないが、図画工作から美術につながる年代（11～13歳）はちょうど、見たことを再現的に表現しようとする傾向が見られる。<sup>3)</sup> そのため、小学校高学年は三次元を二次元に写実的に表す絵画表現に抵抗を感じやすいということが一般的に知られている。このことから、発達段階を踏まえた絵画の指導法やねらいの工夫が重要であると考えられる。

本学の大学生においても、絵に表すことに苦手意識を

持つ学生が複数いると筆者は感じている。授業中になぜ苦手かを問うと、アイデアが浮かばない、下書きは出来ても色を塗ると思っていたのと違う、上手く描けない、という意見があがる。

そこで本論では、「絵に表す」一連の活動の中で、表現と鑑賞を一体化させた指導法について考察を行うこととした。この授業構成で、いくつかの過程で起こる躓きやしやすいポイントを理解するとともに、自分を表現することの喜びを体験し、図画工作の目標を踏まえた指導につなげられるかを検証していく。

#### 2. 絵に表す教材設定

##### (1) 授業概要

- ・科目名 図画工作科教育法
- ・内容 「絵に表す」4コマ ※鑑賞1コマを含む
- ・対象 小学校教育実習直後の教育学科3年生
- ・履修者数 135人（3クラス合計）
- ・アンケート回答者数 131人（同）
- ・実施 2021年10月～11月

##### (2) 実践内容

###### ① 1コマ目：導入とアイデア出し

この教材は、小学校教育実習から戻ったばかりの学生に対し、自分の姿を多角的に見つめて色や形で絵に表すことを通して自己理解を深め、自分のイメージを表現する喜びを体験することを目的としている。その際、「絵に

\* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

表す」活動について児童のつまづきやすい点や、指導のポイントを確認しながら授業課題に取り組んでいくこととしている。

はじめにワークシートを配布し、「1.自分の知っている木々」について 3 分間のラフスケッチを行う。四季ごとに特徴のある木や、登山や旅先で見かけた木、図鑑やテレビで見た印象的な木をそれぞれ簡単に描き出したあと、周囲にいる友達に紹介しあい、筆者が机間指導で見かけた木々を板書して見せる。自然界には様々な木が存在し、生える場所に順応して同じ種類の木にも同じ形のものは無いのだということを経験して次の活動に移る。

次に絵本の読み聞かせを行う。紹介する絵本は2014年にヨシタケシンスケ氏が手がけた『ぼくのニセモノをつくるには』である。内容は「ぼく」のニセモノを作るため、ロボットに「ぼく」の自己紹介を展開するものである。自分に出来ること・出来ないことや、過去・未来の自分、場面によって異なる自分など多様な自己分析が繰り返される。そして p27-28 にはおばあちゃんから聞いた話として「にんげんは ひとりひとり かたちのちがう 木のようなものらしい。」<sup>4)</sup> という一文が登場する。この絵本は多角的に自己を分析する手立てとなるとともに、自分の姿を大切にすることを教える。

読み聞かせの後、今回の課題は自分の姿を木に見立てて描くことであると伝え、ワークシートの続きに取りか

かった。まず「2.わたしについて」の欄には言葉で自己分析を行い、続いて「3.わたしの印象や出来事を書いて」の欄には、周囲の人に自分の印象やこれまでのエピソードなどを書いてもらう時間をとった。「4.自分の姿を木に見立ててかく」の欄には、先のワークシート 2.3 で言語化した自分の特徴をもとにアイデアスケッチを行わせた。その際、自然界にもいろいろな色形の木があったことを指摘するとともに、記号化された固定概念の木のイメージでなく自分を形容する言葉から色形などをイメージしていくことを伝えた。

最後に、「作例は見たいですか」と全員に問い、その人数と理由を共有した。ほとんどの学生は作例を見たいと答え、その理由はイメージの参考にするためであった。作例を見たくないとした理由には、自分が表現したいイメージが揺らぐ、見本に沿わないといけな気がするといった回答があった。この問いは答えが 1 つではなく、指導側がねらいを持って作例を提示する必要がある。先に作品を見せる場合、作品の雰囲気や提示数に注意を払い、「見本」ではなく、鑑賞として子どもたちに表現の特徴や工夫点を見つけだす活動にしていくと、自分の制作に役立てていくことができる。絵を描くアイデアが浮かばない子どもにとっても、表現の糸口を掴むことが可能となる。

本授業で紹介した作品は図 1 のとおりである。図 1 の



図 1 制作前に鑑賞した作品群

①のように写実的な表現のほか、②は赤で中央に力強い幹を表し、逆に③は幹が細く木全体の輪郭を点描でぼかして自分の姿を表現している。④は色付きのシャボン玉を用い、過去に体験した表現活動の中から自分に適した手法を選択して表した。⑤を制作した学生は絵画が苦手だと申告していたが、自分に可能な表現方法として点描を選択し、踊っているような点のリズムで、輪郭線も同様に短いタッチで表され、全体的に緩やかでおおらかな印象を受ける。⑧は木のまわりが海にも空にも見えるという発想で、自身が「海と空」の名で双子として共に成長してきた様子を表した作例である。

このように、見本やお手本として作品を提示するのではなく、表現につなげるための鑑賞として、制作前に色や形などから感じられる作者の意図を学生とともに読み解いた。

## ② 2・3コマ目：展開（制作）

時間外学習としてアイデアスケッチを2案以上行い、2回目の授業から八切画用紙に制作を始める。指導のポイントの1点目は水彩絵の具の取り扱いである。学習指導要領の中学年で登場する水彩絵の具は、机の配置やパレット・水入れの使い方の指導が必要である。また、雑巾は筆先の水分量の調節に用いる。これらを身につけていくことで絵の具が濁りすぎたり、絵が滲みすぎたりすることを防止でき、色塗りの失敗と解釈されるいくらかを補うことが可能である。

指導のポイント2点目は混色・重色への理解である。この教材では使用する絵の具を5色に限定して自分を表すのに相応しい色作りを行うこととした。5色は赤黄青白黒で、この5色があればほとんどの色を作り出すことができる。例えば葉っぱの緑色は、黄色と青色の比率や他の色を少し加えることで、多様な「緑色」を作り出せる。そして、1回塗ったところに重ね塗りする重色によ

って、1回塗りでは表せない色合いを出すことができる。その際、筆さばきによって、タッチも重層的な効果を生むことも魅力である。

指導のポイント3点目は、モダンテクニックや造形遊び、パスやペンなど、これまでの体験から自分の表現にふさわしい画材や表現方法を選ばせ、筆では描けない表現や偶然の効果も歓迎する雰囲気を作っていた。過去に学習した方法を生かすことの大切さを再確認するとともに、表現方法に幅を持たせることで、上手く描けないと苦手意識を持つ子どもにも可能性を示すことができる。

## ③ 4コマ目：鑑賞

完成した作品について、まず自分の作品をよく見て記述する方法で鑑賞を行った。作品の裏に、自分の姿をどのように色・形などで表わしたかをまとめ、感想とともに記入させた。その後、全体で鑑賞を行なった。図2にあるように、色・形が個々に異なり、ひとりひとり異なる木すなわち自分の姿が表現された。教師を目指す学生に、同じ教材でも似通った作品は出来ないということを実感させることはこの教材のねらいの1つであった。

鑑賞に際しては、上手いという発言には注意が必要である。学生には「不思議だ」「気になる」「どうやって描いたのか」「どんなイメージか」など、多様な鑑賞の視点を持つように伝え、印象に残った作品を発表し合う時間を設けた。その方法はまず、学生に気になる作品はあるか問いかけ、一番先に指摘された作品1点を取り上げ、指摘した学生がその印象や質問を全員に向けて発表した。次に指摘された制作者が先の質問に答え、さらに制作意図を述べた。これにより、鑑賞者と制作者の通じた部分と、思いがけない作者の発想を知ることができた。そして、1番目に発表を行なった制作者が気になった次の作品を指摘して質問をし、それを制作した人が答える



図2 クラス全員分の作品展示風景

というリレー形式で発表を行なっていった。このようにして、4 コマ目は記述と口頭での言語活動を行い、個人形式と集団形式での鑑賞方法を展開した。

図3~8は本授業で制作した学生の作品6点で、作品の下には作者の制作意図を掲載している。それぞれの制作意図から自己分析の視点は多岐にわたっていることがわかり、絵本『ぼくのニセモノをつくるには』の読み聞かせの効果がみえてくる。また、制作前に鑑賞を行なったことで、表現の多様性に気づき、木を自分なりに表現していこうという動機づけになった。

鑑賞の一方で、この多様な表現作品をどのように評価するかも教師の重要な任務である。筆者は「取り組んだ

形跡を見つけるのが教師の役目であり、試行錯誤した跡や作者の意図をしっかりと汲み取っていく」と学生に伝えた。評価規準は、「自分の姿を多角的に見つめ、色や形などに絵に表すことを通して自己理解を深め、自分のイメージを表現できたか」と設定した。

### 3. アンケート結果

鑑賞の授業後、履修者に無記名でアンケートを行なった。アンケートの趣旨と作品例の使用については十分に説明を行い、同意を得て回収した。問いと結果は以下の通りである。



制作意図：画面の下の木を支えている手は両親の手で、私の土壌は私を大切に育ててくれた両親であることを表しています。そして、光に向かって枝から出ている手は私自身の手であり、いろいろな人とつながりたい、あんな自分になりたいと枝を伸ばすように努力している一面を描きました。木の右側には、打たれ弱い部分を表しています。

私の「のどか」という名前のように、盆栽のような枝と丸みのある葉で表現しました。

図3 学生Aの作品



制作意図：私は人や物、文字などに色がついて見えます。(共感覚の1つです。)しかし、自分の色は見えないため、自分の色を何色にするかとても苦戦しました。そこで、なりたい自分を考えました。同じ1本の木であるにもかかわらず、魅せ方が毎日異なり、人々を幸せにできる、そんな木になりたいと考えて描きました。また、幹はじっくりと描くことで、芯のある強い人間になりたいという思いが込められています。木の土台がクレパスで鮮やかな色であるのは、私という人間は周りの人たちによって支えられている様子を表しました。

図4 学生Bの作品



制作意図：まどろみの森でもややしているのは今の私の姿。優柔不断で将来に対して不安・悩み・迷いがある様子を表す。それゆえに木は未熟である。水面にうつる姿は内面の姿。将来に対してたくさん想像する様子を表し、黒い霧も晴れ、明るい世界が広がる。

図5 学生Cの作品



制作意図：中高時代までは、まだ何者にもなれるまっさらな状態でした。しかし大学3年生の今、自分の将来進む道が見え始め、私の人生は少しずつ色づき始めていると思います。そのため、白かった木が徐々に淡く色づいている様子を表現しました。

図6 学生Dの作品



制作意図：私は緑が多い大自然で生まれ育ったので、私の原点である緑をいろいろな緑で表しました。枝はくるくると伸びたり、長く伸びたりさせ、私の中の興味や好きなこと、意欲が伸びている様子を表しました。絵の具が5色に限られている中、いろんな緑をつくり色をつけるのが楽しかったです。私を1色で表せない難しさを、この絵にも表すことができたと思っています。

図7 学生Eの作品



制作意図：私は周囲から影響を受けやすいのですが、友人からはしっかりしていて冷静だと言われました。そこで木の幹の右側はガラスのように脆く光を反射している姿、左側は幹らしい姿で表現しました。また、多くの人に面白い、楽しいと思ってもらうことが好きな一面を、蛍の光や星空の輝きで表しました。星には、自分の夢の果てしなさを、それでも惹かれるという思いを込めています。

図8 学生Fの作品

問1：絵本の読み聞かせは自分の姿を振り返ることに役立ったかについては、「とても役立った」「役立った」が合わせて91.6%であった。「どちらともいえない」7.6%については、教育実習で欠席していた学生が何名か投票した可能性がある。(図9)

問2：絵本に出てきた「木のようなもの」というシーンは課題理解に役立ったかについては、「とても役立った」「役立った」が合わせて94.6%であった。(図10)

問3：この課題で学べたことについては、複数回答可で選択する形式でアンケートを行った。学べたことについて回答が多かったものから順に並べて次の図を作成した。(図11) 一番多くの学生が学べた事柄は、自分を色や形などで表すことで90.8%の回答があり、次に表現の多様性が83.2%の回答となった。回答が少なかったものは「試行錯誤してつくりだす喜び」「水彩絵の具の基本的な使い方」「過去に体験した材料や手法とのつながり」であるが、それぞれ40%前後を占め、1つの教材からいくつかの学びが得られたという結果であると解釈できる。

問4：自由記述で、作品鑑賞を通してどのような気づきがあったかを尋ねた。次に示すのは学生のコメントである。

◆同じ題材で描いたとは思えないほど、人によって表現方法が違っていることに気づきました。それぞれが自分と向き合った結果なのだと知り、多様な考え方や捉え方を持った人間の中で私たちは生きているのだと感じました。

◆「木」というと、同じようなものを想像していましたが、実際にクラスメイトの作品を見ると、木の形や色、全てがバラバラで、個性がでるのだと気づきました。また、作品を見て「これ上手いな」と思うだけで鑑賞のおもしろみがないことに気がきました。作者の制作意図を聞くことで改めてその作品の素晴らしさを感じることができました。言語化できなくても、そのような気持ちや人生を表すことのできる作品をつくることはとても素晴らしいことだと思いました。

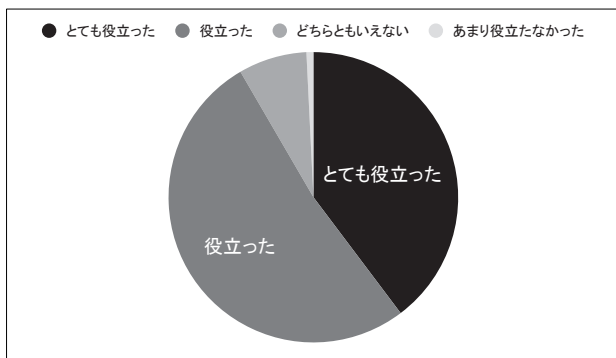


図9 絵本は自己分析に役立ったか

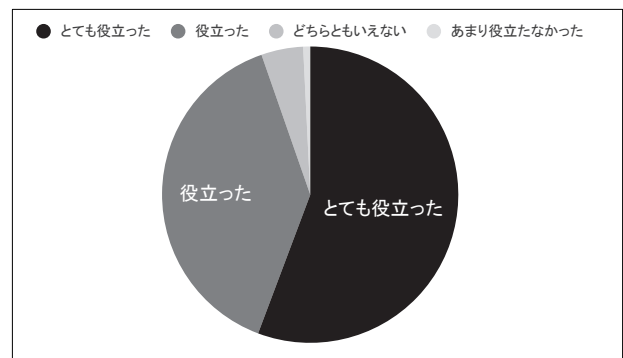


図10 絵本は課題把握に役立ったか

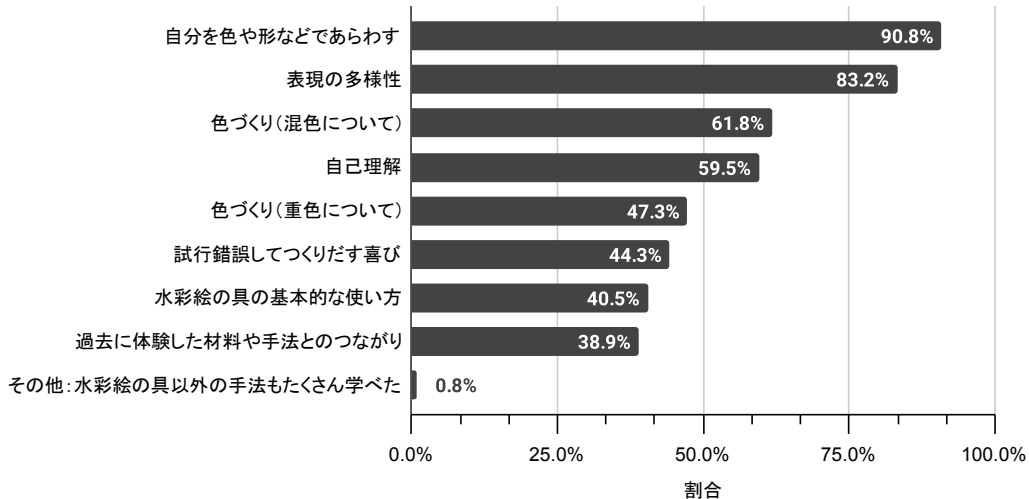


図 11 この課題で学べたこと（複数回答可）

◆改めて自分を見つめ直すという活動からそれを絵にするという経験は初めてで、「今の自分を木に表すとこんな形になるんだ」と描いて初めてわかる自分の姿に気づくことができた。

◆自分の観点で作品を見たあと、感じたことや考えたことが作者の意図と通じあった時、とても嬉しく感じた。その一方で、作者の奥深い意図を聞いた時には新しい発見ができ、作品は様々な見方ができるのだと思った。

◆自分の心の中にあるものを表現することの楽しさを感じた。また、他者の作品に秘められた思いを想像しながら自分なりの解釈を行い、実際の作者の思いと異なっていた時には、作品の見方が変わる面白さに気づきました。

問 5：自由記述で、この課題で気づいた小学校図画工作の指導に活かしていきたいことは何かを尋ねた。次に示すのは学生のコメントである。

◆自分を表現するような活動は、自己理解にも他者理解にも役立つので取り入れていきたい。

◆制作に入る導入部分で絵本を見たことにより、自分の表現したいことが広がったので、作品の制作において何を指導したいのかということを確認にし、それに沿った表現が膨らむような導入をしたい。

◆鑑賞は描く前に見せたり、途中経過で見せたり、最後にしたり効果的に取り入れることが大切。

◆何か思いや意図を持って描こうとすることの大切さを伝えることや、やりながら考えたり試したりする中で新たな自分に出会えることを伝えたい。

◆作ることでさまざまな想像力を養うことはもちろんできるが、鑑賞することでこれはどういう意味なのかな、どのような考えがあるのかな、○○のようだなあなどと

考える経験も想像力を育むことにつながるのではないかと感じました。

◆教師という立場に立った時にその多様性を理解する姿勢が大切だと感じた。今後は子どもたちの作品から気持ちを読み取っていききたいと思う。

#### 4. まとめ

小学校教育実習から戻った学生たちは、理想の教師像や自身の適性など、自分の姿を見つめる時期を迎える。そのような学生に対し、自己を多角的に見つめて色や形で絵に表すことを通して自己理解を深め、自分のイメージを表現していく課題を設定した。

導入では、各自が知っている木々のスケッチや、絵本の読み聞かせによる課題把握を行なった。自己分析の多様な視点や、自分の姿を木に見立てる点において、ヨシタケシンスケ氏の絵本は 9 割以上の学生が役立ったと回答していた。そして、実際に自分の姿を言葉で書き出したあと、形や色のイメージにつなげていくというステップを踏んだ。続いて、作例を見たいかどうかを問いかけ、事前の作例鑑賞によって表現の可能性が広がることを示唆した。現在の学習指導要領には、表現と鑑賞の相互の関連を図るよう示されている。今回の授業実践により、事後の鑑賞はもとより、鑑賞の時期や作例のタイプを工夫することで、多様な発想をヒントにして自らの表現につなげられると実証できた。

展開では、水彩絵の具の使い方を確認し、5 色の混色・重色で自分にふさわしい色作りを行うよう指導した。またモダンテクニックや造形遊び、パスやペンなど、これまでの体験から今回の表現に必要な画材や表現方法を選ばせるようにした。表現方法に幅を持たせ、造形遊びなど偶然の効果も歓迎する雰囲気を作ることで、上手く描けないと苦手意識を持つ子どもにも表現の可能

性を示せることを確認した。

鑑賞では、書く・話す両方の言語活動を実践した。その際、「上手い」ではなく「気になる」「不思議だ」「どんなイメージか」など、視点を柔軟にする発問をもとに鑑賞をしていった。クラスの作品全てを展示することで表現の多様性に気づいた学生は多く、アンケートの自由記述には同様のコメントが集まった。

今回の授業実践を通して、学習指導要領第1目標(2)にある「表したいこと、表し方などについて考え」「自分の見方や感じ方を深めたりする」ことの素晴らしさを、ほとんどの学生が実感できていた。さらに、多様な表現を認め、他者を尊重する態度を養える科目であるという認識が深まっていることもアンケートから読み取れた。

教師は題材ごとの指導法を検討するとともに、年間を見通した指導計画を立てることが大切である。絵に表す活動は、見て描く、想像して描く、材料からひらめいて描くなど、発想のはじまりの設定が複数あるため、それらを年間計画に散りばめることは教師の役目の1つである。それにより、個々の関心や発想のきっかけを上げることができる。特に再現的な表現への関心が高まる発達段階においては、年間の題材設定のバランスをとり、児童のつまずきやすい点を想定して表現と鑑賞の一体化をはかっていくことが効果的である。また多様な表現を認める雰囲気作りを、教師は常に心がけていくことが重要であると言えよう。

#### 参考文献と注

- 1) 学研教育総合研究所(白書シリーズ WEB版 2021年8月調査). 小学生の日常生活・学習に関する調査.  
<https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/202108/chapter8/01.html> (2022.10.14 最終閲覧).
- 2) 同(白書シリーズ WEB版 2020年8月調査). 中学生の日常生活・学習に関する調査.  
<https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/j202008/chapter8/01.html> (2022.10.14 最終閲覧).
- 3) ローウェンフェルド, 竹内清(翻訳)ほか(1963). 美術による人間形成—創造的発達と精神的成長. 黎明書房.  
ローウェンフェルドの造形発達理論によれば, 9歳頃から写実的な表現が芽生えたとされている。
- 4) ヨシタケシンスケ(2014). ぼくのニセモノをつくるには. ブロンズ新社.  
p27-28 では, 人間を木のようなものにたとえるとともに, 「木の おおきさとかは どうでもよくて じぶんの木を 気にいつているかどうかは いちばん だいじらしい。」という言葉が添えられている。
- 5) 小学校学習指導要領(平成29年告示). 図画工作編.

#### 図版

図1~8 制作者から掲載了承済みである。

\*研究倫理については, 美術科教育学会の研究倫理綱領に準拠して執筆した。